

長岡技術科学大学外部評価書



令和元年 6 月

長岡技術科学大学

Nagaoka University of Technology

はじめに

国立大学の法人化以降、国からの財政支援がますます厳しさを増す中、本学は開学の理念の基に、実学を重視し、社会の変化に対応した、実践的・創造的能力を備えた指導的技術者の育成、グローバル人材の育成と国際色豊かなキャンパスの創出、産学連携による地域社会の活性化を促進してきた。

本学では、平成 24 年度以降、文部科学省の「国立大学改革強化推進事業」、「スーパーグローバル大学創成支援事業」、「世界展開力強化事業」及び「卓越大学院プログラム事業」に採択され、地域産業の活性化や人材育成、本学学生の海外派遣と留学生の受入れ増進、世界 10 カ所に設置した活動拠点における企業支援などに取り組んでいる。さらに、グローバル・イノベーションを起こす大学院 5 年一貫制博士課程を新設し、これらの成果を広く社会に発信している。

平成 30 年 12 月には外部評価委員会を開催し、平成 25 年度以降における本学の教育、研究等の取り組みについて、外部有識者からなる外部評価委員による評価を受けた。ここに上げた「外部評価書」は、外部評価委員会において本学が提示した 4 つの評価項目について、外部評価委員会委員から提出を頂いた達成状況評定、総評及び評価・意見を、関係資料とともにまとめたものである。

本学は、令和元年度に大学機関別認証評価を受審する。現在、大学評価委員会が中心となり準備を進めているところであるが、本学が設定した 4 つの評価項目は、大学機関別認証評価の評価基準とは別の視点から設定を行い、本学の個性的な事業や取り組みの成果に対する評価、意見並びに今後期待すること等についてのコメントとなっている。本学ではこれらを真摯に受け止め、さらなる改善を行い、教育・研究に反映させていく所存である。

この場を借りて、本学の将来について共に意見し、評価頂いた外部評価委員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

令和元年 6 月

長岡技術科学大学学長 東 信 彦

目 次

1．外部評価の実施概要	．．．．．	3
2．達成状況評価と総評	．．．．．	4
3．評価項目ごとの評価、意見	．．．．．	7

資料編

長岡技術科学大学外部評価自己点検書

1 . 外部評価の実施概要

【外部評価実施の目的】

本学の理念及び理念に基づく教育研究等の取組を外部有識者に評価頂き、評価結果を大学運営に反映させ、本学の特徴や個性の伸長につなげることを目的とする。

【外部評価委員】

次の産官学有識者を委員として選出した（五十音順、敬称略）

氏名	所 属・職 名
天 羽 稔	Office 天羽代表
大 貝 彰	国立大学法人豊橋技術科学大学理事・副学長
関 聡 彦	hakkai 株式会社代表取締役社長
但 野 茂	独立行政法人国立高等専門学校機構函館工業高等専門学校校長
中 野 和 司	国立大学法人電気通信大学理事
二 橋 岩 雄	前トヨタ自動車九州株式会社取締役会長
前 田 裕 子	株式会社セルバンク取締役 / 海洋研究開発機構監事

は外部評価委員会委員長

【実施内容】

- (1) 本学が作成する「外部評価自己点検書」に基づき外部評価委員が評価を行う。
- (2) 評価は、本学の特徴である以下の評価項目について実施する。
 - 1) 技学教育の発展
 - 2) 世界レベル研究拠点の形成と地域産業の活性化
 - 3) 高専連携及びグローバル・イノベーション人材育成
 - 4) 本学における教員の人材育成等と業務運営等の改善、業務分析
- (3) 外部評価委員が評価項目ごとに次の5段階で達成状況評定を行い、評価・意見を述べる。
 - S : 十分達成している
 - A : 達成している
 - B : 概ね達成している
 - C : あまり達成できていない
 - D : 達成できていない
- (4) 外部評価委員が各委員の意見を取りまとめ、「外部評価書」を作成する。

2 . 達成状況評価と総評

外部評価委員からの評価項目ごとの達成状況評定及び意見をとりまとめた総評を以下に示す。

1 技学教育の発展について

【達成状況評定】S : 4 A : 3

【総評】

開学以来実務訓練を継続的に実施し、実践的能力の向上に生かしている。とりわけ平成 12 年度以降現在まで海外派遣者数を大きく増加させており、平成 28 年度においては国内 377 名海外 59 名の学生が参加する規模に達し、長岡技術科学大学の特色ある教育プログラムとして定着している。その教育効果が大きいことは、評価委員全員の肯定意見のみだけでなく、フォローアップ調査結果、就職先企業から高い評価を受けていることから裏付けられる。

長岡技術科学大学においては実務訓練以外にも技学教育の発展に資する様々な教育プログラムの改善に取り組んでおり、その努力を高く評価する。

例えばエンジニアリング・デザイン教育、アクティブ・ラーニングなど新たな教育プログラムも取り込み教育の質向上を目指している。エンジニアリング・デザインは平成 28 年度より学部の教養科目として開設され、シラバスに落とし込み展開されている。高度な技学を習得した学生に期待されるのは様々な社会課題の解決であり、世の期待や社会が抱える課題を我が事として腹に落とし、専門能力を生かして解決を図る。そのスキルを高める教育を専門教育と併せて組み込む意義は大きい。今後は長岡技術科学大学らしい工夫を加えつつ教育内容の継続的改善に取り組まれることを期待したい。

長岡技術科学大学が「卓越大学院プログラム」「スーパーグローバル大学創生事業」「世界展開力強化事業」の採択を獲得できたのは、こうした技学教育の進化を目指して不断の努力を重ねた成果の証であり、高く評価する。

今後さらなる発展を期するためには多言語でのコミュニケーション能力の向上が課題となり、英語力の強化が必要との指摘、更にはその向上策へのアドバイスが多くの評価委員より提起された。中でも「高専における教育と受け皿となる長岡技術科学大学との関連性に着目し効果的な連携が強化されると良い」、「目標設定管理が必要」「TOEIC のスコア獲得だけでなくコミュニケーションを支える教養・人格形成に傾注されたい。」等の意見は参考にして頂きたい。

2 世界レベル研究拠点の形成と地域産業の活性化について

【達成状況評定】A : 6 B : 1

【総評】

教員一人当たりの論文数や科研費採択状況、国際共著論文割合の順調な増加、材料科学分野やグリーンテクノロジー分野等得意とする分野の被引用 TOP10%論文数の増加などからみて長岡技術科学大学の研究レベルは相当高いと評価できる。

こうした研究力や技学の追求を生かして、国際技学カンファレンスをはじめ長岡を会場とする国際会議を数多く開催しこの地を国際研究拠点として育成しようと努力している点を高く評価する。

平成 14 年にテクノインキュベーションセンターが設置され、企業の技術相談・産学連携活動を活発に推進している。長岡技術科学大学は今後こうした地元企業への地道なサポートや共同研究に止まらず、大学が持つ高度な技術シーズを生かして新たな産業を生み出す迫力ある取り組みができるポテンシャルがある。そのためには産業活性化・創生の視点を長岡市から新潟県、更には東北エリア全域に拡げて戦略的に推進する産学官連携が重要であるが、長岡技術科学大学発ベンチャーが多数創出され地域創生の口火を切ってくれることを期待したい。

3 高専連携及びグローバル・イノベーション人材育成について

【達成状況評価】 S : 4 A : 3

【総評】

平成 25 年より長岡技術科学大学・豊橋技術科学大学・高専機構の三機関が連携した教育改革が着実に実行されて成果を上げている。高専から技術科学大学大学院までのシームレスなカリキュラムが構築され世界に誇れる技学教育の体系化ができた。これを契機に三機関連携がさらに加速し、引き続き文部科学省の支援を受け「グローバル・イノベーション共同研究」が行われた。長岡技術科学大学はその研究成果を活用した人材育成を着実に実行して成果を上げている。加えて高等専門学校成績トップレベルの編入生を積極的に受け入れる方策として5年一貫制博士課程の「技術科学イノベーション専攻」を設置し、その中で高専教員育成に関するコースも設置している。こうした高専連携を進化させる取り組みを高く評価する。

今後、現状の連携成果に甘んじることなくグローバルに活躍できる技術者の育成、イノベーションをリードできる人材の育成を目指して取り組みを継続して頂きたい。評価委員からは参考となる以下の意見も提起されている。

* 増加傾向にある高専女子学生を積極的に編入させる方策と体制整備

* アジア諸国に加えて欧米有力大学との連携開拓

* 従来の産業区分・技術分類にとらわれない境界にイノベーションのヒントがある。(例：フィンテック、アグリテック) イノベーションを導くスキルを磨く教育活動に期待したい。

4 本学における教員の人材育成等と業務運営等の改善、業務分析について

【達成状況評定】 A : 5 B : 2

【総評】

平成 28 年度に IR 推進室を設置し学内外の各種データを収集・分析し業務改善策を提言する体制がつけられた。これを受けて東学長のリーダーシップのもとで経費削減や学内委員会の効率的な見直しに成果を上げている点を高く評価する。

教員の人材育成に関しても若手教員の育成や資質向上をサポートする制度改革にも工夫を凝らして取り組んでいる。

豊橋技術科学大学・高専機構と連携し、事務職員の国際対応力強化の取り組みも行っており、職員のモチベーション向上や学内組織連携強化にも繋がるユニークな活動であり評価できる。

テニュアトラック制度・サバティカル制度・クロスアポイントメント制度も導入され、他の国立大学に遜色ない人材育成を支える体制が整備された。

しかし大学における IR 活動は企業における TQM 活動より歴史は浅く、活動が多岐にわたる、また活動の一義的な体系化に難しさがあるのではなかろうか。長岡技術科学大学は高等専門学校の編入生を受け入れ、更に高度な技学を身に着けさせるという開学のミッションを背負い、大学の本分である創造的研究と教育の二兎を追う立場にあり、リソースのバランスが悩ましい。

今後日本の産業の発展に期するためには「技学」を極める最高府であるものの、是非「学生の質向上」に力点を置いて IR 活動を推進して欲しい。

三機関連携の蓄積が大いなる強みとなって生きてくる。

3 . 評価項目ごとの評価、意見

評価項目 1 から 4 について、外部評価委員からの意見をまとめて以下に示す。

1 技学教育の発展について

技学教育の発展に関する本学の取組についての印象

- S : 十分達成している 4
- A : 達成している 3
- B : 概ね達成している
- C : あまり達成できていない
- D : 達成できていない

(1) 高く評価できる点

実務訓練に関しては非常に満足している。

開学以来継続している実務訓練をはじめとする実践的技術者教育を国際的に展開することで特徴的な教育の質向上を図っており、現時点においてスーパーグローバル大学創成支援事業、大学の世界展開力強化事業（2件）そして今回卓越大学院プログラムにも採択されている。4つの主要な文部科学省補助金事業に採択されている国内唯一の大学と思われる。比較的小規模の工学系単科大学として、教育システム、グローバル化、教育の質及びアウトカムの点において極めて優れた成果を挙げられている。この点は、卒業生・修了生の就職先企業からも極めて高い評価を得ていることから裏付けられる。

技学を支える重要なカリキュラムの一つである実務訓練においては、長い歴史を持つ国内の実績に加え、近年では海外でのインターンシップの実績も発展に寄与していると思われる。国内のみならず、グローバルな視点を持つことは今後の産業界においても必須と思われる。

技学教育の根幹をなす実務訓練は、他では見られない特徴的な教育プログラムであり、平成 28 年度で国内 377 名、海外 59 名の学生参加と大きな実績を上げ、また詳細なフォローアップ調査を行っており、学生への教育効果の大きいことが伺える。

独自のツィニングプログラム留学生数が増加している。

留学生数の割合が国立理工系単科大学の中でトップレベルにある。

卓越大学院プログラム、またスーパーグローバル大学、世界展開力事業の採択など、これまでの長岡技術科学大学の技学教育の成果として、高く評価できる。

基礎となる工学教育、高等専門学校・長岡技術科学大学の良き特徴ともいえる実践重視の教育に加えて、エンジニアリング・デザイン教育、アクティブ・ラーニングといった最先端の教育手法もタイムリーに取り込み教育プログラムの改善を行っている努力を高く評価する。エンジニアリング・デザインは平成 28 年より学部の教養科目として開設され、シラバスに落とし込み展開されている。まだ緒に就いたレベルであろうがその進化を期待する。高度な技学を習得した学生に期待されるのは様々な

社会課題の解決であり、世の期待や問題を自ら取組む課題として腹に落とし専門能力を生かして解決を進めていく。そのスキルを高める教育を専門教育と併せて組み込むことは大切であり、JABEE の評価対応という目的だけではなく本質的な理解と動機付けのもとに教育内容の継続的改善に取り組んで欲しい。

より実学を重んじた教育という観点から実務訓練を行っている点は、産業界でいち早く馴染んで企業の戦力になるために好ましい教育といえる。特に海外企業への派遣も 59 名(平成 28 年)と多くなり、平成 29 年度は、海外実務訓練を 66 名が経験したことは評価に値する。日本の企業への就職においても、グローバルな企業が多い中で、貴重な経験となる。

昨年より認可が始まった専門職大学との差別化を図るためには、学生の質が重要となる。

(2) 改善を求める点

英語力強化の取組；もう少し具体的な目標設定があってもよい(例：TOEIC スコア向上)。

ゴールの設定が必要である。例えば海外派遣プログラム等。

今後ともさらなる技学教育の発展に尽力されることを期待する。

多言語でのコミュニケーション能力のより一層の開発が課題である。具体的な目標を設定することで、より効果的な活動が期待できる。語学に関しては、TOEIC スコアだけでなく、実際のコミュニケーション能力を図るような指標があると良い。

開学以来実務訓練を実施し、実践的能力の向上に生かしている不断の努力は高く評価できる。とりわけ西暦 2000 年以降現在まで、海外派遣者数を大きく増加させた点はグローバル化の進展した今日において時宜にかなった企画である。長岡技術科学大学はこの海外派遣のみでなくグローバルな活躍を果たせる技術者の育成を目指してユニークな教育プログラムを用意し、改善を続けてきた。外部委員の一部から、TOEIC の実績レベルがわずかな向上にとどまっている点に触れ、英語力向上の一層の改善努力を期待する様々な意見が提起された。しかし海外実務訓練アンケートにおいて「意思疎通能力が向上したか?」「海外に身を置いて日本への理解が深まったか?」といった設問に対する肯定的回答が低い点も注目すべきである。コミュニケーション能力は語学力だけではない。日本の文化理解や教養に基づく人望の形成にも傾注していただきたい。製造業の海外製造拠点において活躍するグローバルリーダーに高専卒業生が多かったこと、その世代が退役する時代となった今日、彼らがなぜ活躍できたかを虚心坦懐に振り返り教育プログラムに生かす期待は大きく、意義深い。

学生の質という点で、やはり英語力は課題である。TOEIC の結果から判断すると、語学力の向上がいまいちと言える。グローバル企業においては、就職の機会を失うため、語学力の向上が求められる

(3) その他のコメント

大学の学生に対する期待と、学生の意識にギャップがないか、ここについても何等かの方法で現状を確認し、改善すべき点については、適切な対応を取るべきである。

国内実務訓練の受入先の評価を知りたい。その評価結果を長岡技術科学大学 FD はもちろん、高専教育の FD にも利用可能である。

先進大学（世界ランキング上位校）への留学・海外派遣を広げるため、欧米有力大学等に対する交流の開拓を期待する。

英語力強化において、オーストラリア語学研修による効果は大きいとのことであるが、語学研修をより拡大することが望ましい。

英語力強化に関し、高等専門学校の時の教育との関連性を分析してほしい。

技学教育の成果と編入学前の高専教育の成果との関係を教育の質保証の点から議論することは重要である。

技学教育の質保証をどのように整理されるか検討いただきたい。

エンジニアリング・デザイン教育（JABEE）および関係するアクティブ・ラーニング教育に関して、さらなる長岡技術科学大学独自の取組（たとえば、異なるバックグラウンドをもつ学生から構成されるグループによる課題解決型教育）を期待したい。

工業系大学の共通の課題と考えるが、特にグローバル大学としてこの方面を先導する立場から、英語教室等（場合によっては、英語教育に関わる企業）の全面的協力を得て、学生の総合的・実践的な英語力の強化（たとえば、KPI としての TOEIC 計測（第 3 期中期期間では修士学生 40% に対して TOEIC 550 点以上となっている））をお願いしたい。

昨年より、専門職大学が認可されるようになり、そちらでも学士が取得出来る様になる。実学を重視する点では、長岡技術科学大学と共通であり、差別化は学生の質にあると思っている。

現段階では工学系はまだ認可されていないが、時間の問題と思われる。

差別化を図り、敢えて長岡技術科学大学を希望して貰えるよう、きちんと実力をつけて人材を輩出出来るよう望んでいる。

2 世界レベル研究拠点の形成と地域産業の活性化について

- S : 十分達成している
A : 達成している 6
B : 概ね達成している 1
C : あまり達成できていない
D : 達成できていない

(1) 高く評価できる点

企業との共同研究活動は非常に活発で素晴らしいと思う。

教員一人当たりの論文数や科研費採択状況からみて、国内トップクラスの研究力を維持している。材料科学分野やグリーンテクノロジー分野などで国内競争力が高い点が評価でき、特に材料科学に関しては被引用 Top10%論文数が 42 本と、世界的な影響力をもつ研究分野がある点は大いに評価される。また、民間との共同研究実績においては、国内の理工系単科大学の中では 1 位、2 位を争っており、産学連携の取組も高く評価される。

地域産業の活性化においては、長岡技術科学大学はすでに長年にわたる実績と評価がある。近年の実績を見ても年度によって多少の増減はあるが、安定していることが確認できる。

論文総数には大きな変化は見られないものの、国際共著論文割合が増加している。

被引用 Top10%論文数が 5 年間で Engineering 36 本と健闘している。

若手研究者支援のため、研究資金助成を行い、翌年度の科研採択に結びついている。

新潟地域の共同研究件数が増加傾向にある。

地域連携および活性化の一環として、長岡市職員 1 名が常駐している。

国際技学カンファレンスをはじめ長岡を会場とする国際会議を数多く開催し国際研究拠点形成への努力を続けている点を高く評価する。

教員一人あたりの科研費採択費は、日本全国で 18 位であることや、得意 7 分野が全国上位 10 機関以内に入っていることから、研究レベルは高いと言える。

海外共著論文割合も順調に伸びていることから、グローバル化は進んでいると言える。

(2) 改善を求める点

地域産業の活性化に関して新潟にあまりにも偏りすぎているのでは？

世界レベルの研究拠点の形成という観点からすると、材料科学分野などはすでにそのレベルにあると思われるが、大学全体の研究力という点において足腰の強い研究大学へ発展させるためには、世界レベルの研究分野が複数出てくるような研究環境整備も今後取組として重要ではないだろうか。

長岡技術科学大学の研究拠点が世界的にどのレベルにあるのかは、評価が難しい。国立大学の中では、各統計でも高いレベルにあることは確認できる。世界レベルということになると、具体的にどのようなイメージなのかを定義する必要もあるように思う。

平成 14 年テクノインキュベーションセンターが設置され、企業の技術相談・産学連携活動を推進しているが未だ小粒な活動に甘んじているのではなかろうか、今後は学内研究シーズを生かしたベンチャー起業を更に促し地域に新たな産業を創出する戦略強化を期待したい。地域創生は地域間競争でもある。

国際会議、モノづくり企業展、メッセ等を長岡市との連携に止めず新潟県、東北エリアへと拡大し集客を増やす。狭い領域や組織間で成果を競うのではなく産学官の大同団結が成功の鍵となる。

メッセ名古屋が 1,400 社を超す参加企業、6 万人を超す入場者数を誇る規模まで成長した模範例もある。いつしか人と情報の流れが関東から東北に逆流することを期待したい。

産学連携に関する国からの支援は、一時期よりも少なくなっている。この点を踏まえても、実学を重視している大学として、産学連携が活発であり、特色であるというところを見せていくべきである。

共同研究は多くなっているが、大学発ベンチャーを見据えた産学連携という観点からは少し弱いと思われる。大型研究だけでなく、地元の中小企業の悩みに対して即対応してあげられる等の強みを持つ方が好ましい。

(3) その他のコメント

国立理工系単科大学の中では一定レベル以上にあることが認められるが、高等専門学校の編入学の多い大学の工学部との比較も必要である。

科学研究費の採択状況および採択に向けた支援の取組状況を示すことが必要である。

女性研究者支援状況を示すことが必要である。

世界レベル研究拠点の形成については、卓越大学院での国際的なコンソーシアム(ネットワーク)の形成によって、まずは教育(学生)を中核として、その次のステップである国際共同研究の進展(Top10%論文、国際共著)にも期待したい。

地域産業の活性化については、地域の大学として十分に機能している。関連して、教員一人あたりの共同研究費 150 万円というのも優れた実績である。さらに、全国区の国立大学として、得意分野(材料科学等)を中心に大型の組織的な共同研究(共同研究講座)も考えてもらいたい。

技術発信・社会還元が弱いと思われ、広報にもっと力を注ぐと効果が出るはずである。

3 高専連携及びグローバル・イノベーション人材育成

- S : 十分達成している 4
A : 達成している 3
B : 概ね達成している
C : あまり達成できていない
D : 達成できていない

(1) 高く評価できる点

他の大学に類を見ない素晴らしいプログラムである。

個々の高等専門学校との取組は高く評価される。

グローバル・イノベーション人材育成についても、技術科学イノベーション専攻を立ち上げられ、高等専門学校と協働したシームレスな協働教育体制による教育を実践されており、高く評価される。

グローバル人材育成については、環境が重要と思われる。当校の高い留学生比率は他校と比較しても、他国の学生と交流できる環境があるのは明らかである。カリキュラムも重要であるが、留学生比率目標を達成することができれば、一層の促進が期待できる。

全国の高等専門学校と連携した教育研究とグローバル・イノベーション人材育成を実施しており、高く評価される。

高等専門学校成績トップレベルの編入生を積極的に受け入れる方策として、5年一貫制博士課程の「技術科学イノベーション専攻」を設置し、その中で高専教員育成に関するコースも設置されている点は高く評価される。

平成25年より長岡・豊橋の両技術科学大学と高等専門学校機構の三機関が連携した教育改革が着実に実行されて成果を上げている。高等専門学校から技術科学大学大学院までのシームレスなカリキュラムが構築され世界に誇れる技学教育の体系化ができた。この活動の副次強化として三機関に属する学校間の連携が加速し、共同研究等の成果に結びついている点も素晴らしい。

三機関連携（高等専門学校機構・長岡技術科学大学・豊橋技術科学大学）の文部科学省支援の競争的資金を足がかりに充分連携が取れていると判断できる。特に、グローバル・イノベーション共同研究等を通じて体系的な教育が行えたと判断できる。

(2) 改善を求める点

高等専門学校との連携プログラムを地域産業の活性化プロジェクトにカウントしても良いのでは。

従来の産業区分の狭間にイノベーションのヒントがある。例えば農作物工場、医工連携、フィンテック等々。このような異質な技術境界に潜む革新を導くマルチ人材教育も必要だと思う。

アジアへの海外体験は充分に行われているが、それ以外の欧米へ向けての教育が少ないように思える。TOEICの伸びが良くない原因も、この辺に有るかもしれない。

(3) その他のコメント

豊橋技術科学大学と同様に、高専連携は技術科学大学が常に追求すべき課題であり、その意味において、それが「十分達成されている」とすると、それ以上の発展がなくなるかもしれないという危惧から、あえて評価をAとした。

高等専門学校の産業界での評価は高い。その高等専門学校との連携は長岡技術科学大学にとっても欠かせない差別化要因である。また、高等専門学校とのシームレスな協働教育体制もあり、連携はしていると思われるが、産業界という視点から見ると十分とは言えないのではないか。本来の目的とは異なるかもしれないが、長岡技術科学大学は高等専門学校輩出の学生を他校以上にブラッシュアップしていることをPRしてもよいのでは。

高等専門学校の編入生に対し、高専教育 MCC とシームレスに連携・接続したカリキュラム構成の提示をお願いしたい。

高等専門学校に女子学生が増えている状況から、高専女子学生を積極的に編入させる方策を期待している。

高等専門学校は世界的にも注目されている教育システムで、高等専門学校機構・豊橋技術科学大学との連携はきわめて重要である。3機関での STI-Gigaku 2017 なる学生を巻き込んだ国際シンポジウムの開催も素晴らしいと思う(電気通信大学・豊橋技術科学大学・東海大学が共催する Irago Conference との Joint も今後、考えられるかもしれません)。

文部科学省の競争的資金終了後の高等専門学校との連携等が課題となる可能性がある。

4 本学における教員の人材育成等と業務運営等の改善、業務分析

S：十分達成している

A：達成している 5

B：概ね達成している 2

C：あまり達成できていない

D：達成できていない

(1) 高く評価できる点

学生からのアンケートは非常に良い。

平成 28 年度に IR 推進室を設置し、組織的に各種データ分析を実施し、業務内容の検証と改善策の提言を学長に答申している。これを受けて東学長のリーダーシップの下で、経費削減等を実現している点（民間企業から見れば当然のことかもしれないが）は、同じ大学運営に関わる立場の人間としては高く評価したい。加えて、学内委員会等の総点検を行い、145 あった委員会等を 101 に再編し、構成員の見直しを、学長リーダーシップの下で断行した点も大いに評価する。

グローバルという視点を持つ長岡技術科学大学においては、学生のみならず教員のグローバル化に必要な資質を強化することは必然であり、サバティカル研修制度は一定の成果を出している。

テニュアトラック制度が機能している。

IR 推進室が機能している。

学内委員会の再編・統合により、145 委員会を 101 に再編し、会議総時間数が平成 26 年度に比べ平成 29 年度は 70% 減少と、全学的な業務運営改善が見られた。

高等専門学校も長岡技術科学大学も共に連携し教育に大変熱心に取り組んでいる点が素晴らしい。

大学にも様々なステークホルダーが存在するし、自らの研究成果も求められる環境下において学生の教育を優先している様子がよく伝わり好感が持てた。

長岡技術科学大学においては若手教員への世代交代と育成に組み込み成果を上げている。また教員の資質向上をサポートする制度改革にも工夫を凝らして取り組んでいる。

豊橋技術科学大学、高等専門学校機構と連携し、事務職員の国際対応力強化の取組を行っているが、モチベーション向上や学内連携強化にも寄与するユニークな活動であり評価できる。

テニュアトラック制度、サバティカル制度、クロスアポイント制度を導入し、教員の人材育成は順調に整備していると思われる。

145 有る委員会を 101 に再編する等、業務効率化を行ったことは評価に値する。

(2) 改善を求める点

クロスアポイントメント制度はまだ新しいが、もっと積極的に進めるべき。

今後クロスアポイントメント制度のデータをどのように開示するのか。

女性研究者支援策を明示する必要がある。

学びは一生もの。学び続ける師の背中を見て学生は育つと心得、現在の取組と不断の改善を継続してほしい。

男女共同参画推進室を立ち上げたことは評価するが、女性研究者増に関しての工夫等が弱いと思われる。

(3) その他のコメント

今後もさらに、IR推進室を中心に業務運営面の効率化、経費削減、外部収入増のために分析を進め、学長リーダーシップの下で取組が進むことを期待する。なお、これらの取組が対外的に高い評価を受けた訳ではないので、A評価とする。

外国人教員の比率を上げることも、教員のグローバル化に繋がるのでは？

業務運営については、厳しい予算の中で今後もより一層の工夫が必要になると思われる。民間企業も同様だが、無駄を無駄として認識し、強い決断力で排除すると同時に、必要であればICTを活用した改善も必要である。

サバティカル研修制度の利用者が、10年間で16名と少ないようである。教員の海外研修制度の充実が必要と思われる。

大学教育の質保証の観点から教員の能力向上方策を検討されたい。

人事給与マネジメント制度改革において、教員のモチベーション向上をめざすインセンティブを考慮した新しい制度設計に期待したい。

若手教員への支援策の効果について引き続き注視していただきたい。

最近若者の学会離れが甚だしい。奨学金の負債を背負って社会に出て、学び続ける余裕はないのが実情かもしれないが支援策は必要である。大学においても社会に出てからも専門性を高める努力を促す動機付けを行うと共に卒業生向けのキャリアサポートサービスを実現していただくよう要望したい。

優秀な学生を受け入れることはとても良いことであるが、留学生という性質上、大学の技術流出に留意する必要がある(統合イノベーション戦略推進会議でも、大学の技術流出に関する弱さが懸念されている)。

学生は、職務発明として大学が特許を吸い上げることが出来ないため、きちんと契約を結ぶことの出来る人材・知財の組織が必須である。